

「待ち望む人は忍耐の人」

～すべてを明け渡す人生・キリストの十字架～

「わが魂よ、何ゆえうなだれるのか。何ゆえわたしのうちに思いみだれるのか。神を待ち望め。わたしはなおわか助け、わが神なる主をほめたたえるであろう。」

詩篇42篇5節

ユダヤ人の歴史は、「待ち望み」の歴史でした。しかし、いったんメシヤがやってくると、この時とばかり、「主よ、ダビデの子よ、わたしをあわれんでください」と積極的にその愛を求めた人々もいれば、その逆に、妬みと憎しみによって、そのメシヤを殺してしまった者たちもいました。その瞬間的な応答によって歴史が造られていきました。

今も、主を待ち望む時と、そして、この時とばかりに主に叫び求める時が与えられています。「見よ、今が恵みの時。見よ、今が救いの日である。(2コリント6:2)」。

本日の聖書箇所には御言葉の種がそれぞれの心にまかれたという状況が書かれています。神様はイエス様という愛の御言葉をこの地上にまいてくださいました。その愛の種は今もまかれ続けています。いつでもその御言葉に応答していくなら、忍耐して受け止め続けていくなれば、必ず、実を豊かに結んでいくようになると聖書は教えています。大事なことは、「決してあきらめないこと」です。

「『あなたの将来には希望がある』と主は言われる」という今年のメッセージは確実です。そう語られた主は、「昨日も今日もいつまでも変わることがない(ヘブル13:8)」からです。

しかし、最終的に私たちは自分自身を神に明け渡すことなしに栄光ある豊かな実を結ぶことはできません。それは最終的なこの世での人生の死を迎える時に実感することです。

ヘンリー・ナウエン師はある時、悪性腫瘍に悩まされている友人を見舞いました。その友人は今まで多くの人々のために尽くすことを喜びとして生きてきましたが、もうこれ以上良い働きをすることができない、こんな人生をどうやって肯定し、受け止めればよいか？と質問しました。そのときにヴァインストーンという人物の「待つことにおける成長」という書物を共に味わうことを通して乗り越えることができたそうです。

「イエス様が十字架にかかられた時、人々が異邦人にイエス様を引き渡されただけではなく、神様ご自身も人々にひとりの愛子であるイエス様を引き渡されました。全能の神が敗れて無力となって、自分の全存在を人間に明け渡されました。そして、後は人間たちそれぞれが自分の判断でイエスを主とするか、罪人として十字架で殺してしまうかということを中心に委ねられました。待ち望むとは、最終的には受動的になること。悪性腫瘍で苦しみ悩み、多くの人々の世話になることをもすべてありのまま受け入れることを通して、イエス様が通った栄光ある明け渡しを私たちも経験することができるという世界が開かれるのです。」